展 望

家 庭 と 非 行 形 成*

東京都中央児童相談所 水 島 恵 一**

1 家庭の外的要因

非行を生み出すような家庭の条件として、まずその外的要因に研究者の目が向けられたことは周知のとおりである。まず貧困家庭については、Breckinridge と Abbott(8) が非行少年の 89% が貧困家庭から、さらに 76% が極貧家庭から出ていることを報告し、Ettinger(15) が正常児の 32.8% に比して非行児の 52.8% が貧困家庭の出であったことを見出して以来、Burt(9)、Morrison(44)、Shaw(58)、Merill(40) などによつて強調され、とくに相対的貧困が重要視されて来た(9,16)。Glueck(22) の研究においては、無非行群における生活扶助世帯が 12% であつたのに対し、非行群では 28.6% に達し、逆に経済的に安定した家庭は、前者の 12% に対して後者の 5% であつた。しかし Glueck をはじめ、一般に貧困それ自体を直接非行の要因とみなすという論はまれであつて、Healy と Bronner(25) をはじめ、臨床的にはそれをむしろ無視する論も強い。日本においても、戦後の竹村(64)らの研究において貧困家庭の重要さが指摘されており、最近でも館沢(68)、牛窪(72)らの研究によつて、対照群との間に経済的な差が見出されているが、ここでもとくにそれが直接非行誘因としてとくに重視されているわけではない。むしろ貧困は住居を狭くし、健全な昇華の機会を失なわせ、親のしつけや監督を不適切にするといういみで重要だと考えられるのであつて、このうち住居の狭いことについては、Shaw(58)、Glueck(22)、Barker(4) らの研究があげられ、日本でも館沢(68)、小野(50)らによつて実証されている。ただし小野の研究においては、在宅非行少年と収容非行少年との間に住居条件の差があり、これは後述する欠損家庭の場合と同じく、施設収容者の selectivity を示しているとも考えられるのであつて、過

去の施設内非行少年を対象とした研究に対して再吟味の必要性を示唆しているといえよう。

欠損家庭や施設家庭の影響についても、Shideler(59) が無非行群の 25% に対して施設非行者群の 40% ないし 70% が欠損家庭の出であることを見出し、Burt(9) が非行少年の 60% に欠損家庭を見出したのをはじめとして Elliott(14)、Lumpkin(35)、Slawson(60)、Glueck(21,22)、Merill(40) などの多くの研究によつて重視されているが、Shaw と McKay の研究(58)では、同じ地域での欠損家庭の率が非行群 42%、無非行群 36% と有意差を示していない。Breckinridge ら(8)や Saunders ら(56)の結果もむしろ否定的であり、Campbell(10)は一時的な体験として欠損の直接の衝撃は認めるが、それが過ぎればあまり問題は残らないとしている。Weeks(73)によれば欠損家庭の非行への影響は重大でないが、欠損家庭児は施設に入れられやすいという selectivity を強調しており、日本において小野(50)、樋口(28)が在宅非行少年と収容非行少年の家庭欠損率の差を認め、前者と無非行者との差がむしろ僅少であることを指摘したのと軌を一にしている。こうして日本で欠損家庭の重要性を強調した谷(66)、吉益(74)らの諸研究も再吟味されるべきであるが、樋口が指摘したように、時代とともに欠損家庭の重要性に変化が起きているかもしれない。最近の、諸条件をマッチさせた対照群との比較では、館沢(68)が差を見出しているのに対して、牛窪(72)、大浦(51)、国立教育研究所(33)では有意差がなく、大浦は欠損よりも継父母関係に重点を見出している。Monahan(43)、Healy(25)、Elliott(14)、日本では竹村(64)らの研究によつて女子の方が欠損の影響を受けやすいことが指摘されているが、男女差を認めない研究結果もあり、父欠損と母欠損のどちらが重要かについても異論が多い。ここで吉益(74)、樋口(28)、小野(50)が見出したように、幼少期では母欠損が重要であり、少年期では父欠損の方に重要性があるということは、後述するパーソナリティ発達と関連して興味深い。しかし一

* Review : Family and delinquency formation.

** by Keiichi Mizushima (Tokyo Central Child Guidance Center)

般に、Nye(49)、牛窪(72)、坪田(69)らによつて分析されているように、欠損家庭における欠けていない方の親や継父母の心理を通じて問題が起こってくる面も見逃せず、これをさらに一般化すれば、結局は養育者のパーソナリティや態度の問題につらなつていくのであつて、両親が常に争つていくくらいならば離別して平和な欠損家庭にした方がよい(47)ということにもなり、またこのゆえに同じ欠損にしても、死亡によるそれより遺棄、離別による場合の方が非行と関係しやすいのである(16,61)。

その他の家庭の外的諸要因についても、したがつて、親の年令、国籍、年令差、その他単なる外的なものが非行との関係を示していないのに対し、親のパーソナリティや態度に直接関係する諸要因は非行と関係することを示している。たとえば総括的な Glueck(22)の研究と、日本における同種の館沢(68)の研究を比較してみると、外的色彩の強い因子でともに有意と認められているものは、ほとんどが経済および欠損に関したものであり、これに対して親の職業、勤労習慣、家族生活のやりくり、家庭におけるリクリエーションなどは、比較的有意となつてゐる。ただし Glueckの結果と館沢の結果では必ずしも一致しない面があり、前者においては家計の計画性リクリエーションの面などが強調されているのに対し、後者においては家の中の規律の面がより強調されている。このほか多子家庭が非行を生みやすいこと(8,22,64)、末子が非行に陥りにくいこと(22)が一般の傾向のようであり、これに対してひとりつ子、長子については異なつた結果がえられている。

2 不道德家庭および親のパーソナリティ

不道德家庭についても、HealyとBronner(26)が非行児の家庭の21%に、犯罪者、アルコール中毒者、その他の非行者を見出したのをはじめとして、BreckinridgeとAbott(8)、Glueck(20)、日本では樋口(28)その他多くの研究者によつて、その重大さが見出されている。日本では吉益(74)らによつて、この問題の遺伝生物学的な探究も行なわれているが、ここではその点は省略し、もつぱらその心理力動的影響について考慮したい。不道德家庭の心理的影響としてまず問題になるのは、非行への誘惑、モラルの欠如を中心とした、非行的感応(acculturation)の機制であるが、実際問題として親が子に意識的に非行をすすめることはまれであるし、非行的な親でも子どもが非行をすれば叱るのが常である。さらに不道德家庭の大部分が、同時に葛藤家庭であることを考えると、この問題は、父が軍人だから子どもも軍人になりやすいというようなことと簡単に同一視はできない。

この点最近の McCord(39)の研究は示唆に富む、McCordはCambridge-Somerville少年研究(53)の対象となつた少年たちの詳細な家庭調査に基づき、非行の起こつたものと起こらなかつたものについて、不道德家庭と親のパーソナリティの関係を論じているが、それによると、親の不道德、すなわち偏つたrole modelがあつても、しつけが一貫していれば、子どもは犯罪性をとり入れない。これに対してしつけが矛盾し、体罰的であるときは、きわめて親の犯罪性がとり入れられやすい。父が犯罪的であつても母が愛情豊かであれば犯罪性がとり入れられず、逆に母のrole-modelが偏つていても、父または母に愛情があれば危険は少ないのである。このこの意味は後に考察したい。

親のパーソナリティに関してもうひとつ重要なものはSzurek(63)や、Giffin, Johnsonら(18)によつて臨床的に見出された親の無意識的誘惑に関するものである。すなわちある種の非行の背後には、親が自分の敵意の表現として無意識的に子どもの非行を願ひ、その言動を通じて、子どもが意識的無意識的に誘惑を感じて非行へと駆られていることが見出された。このような機制はその典型では無意識としてしか現われないが、さらに一般的な形としては、非行それ自体ではないがそれに準ずる行動を賞賛したり期待するという親の気持ち、たとえばBandura(3)らが指摘するようにある種の攻撃的行動の容認というかたちで、かなり多くみられるものである。これは次にのべる親の態度、しつけに関する問題と関係する。

このほか親のパーソナリティの歪みと非行との関係はJenkinsら(27,32)によつても組織的に研究され、さらに心理療法やケースワークの諸研究(26,34,48,75)を通じて明らかにされているが、直接心理テストを用いて定量的に親のパーソナリティを測定した研究は少ない。市村(30)が非行少年の父母にロールシャッハを施行し、親の情動障害、精神病質的傾向、性反応の異常性を見出したことは異色である。ここで市村は、子ども(主として男子)のパーソナリティが、その深いレベルでは母親に近似し社会的レベルでは父親に近似していることを見出し、親の精神病質傾向が子どもの再非行と関係のあることを見出している。

3 親の態度に関する一般的研究

すでに、HealyとBronner(26)は、非行少年の家庭の大部分に、少年が道徳性をとりいれるのに必要な条件のかけていること、権威に対する適切な態度を発達させるに適当な条件の欠如、家庭内人間関係の不安定さ、両親

親からの直接的な不道徳の影響、健全な情緒の発達を阻害するような家庭内葛藤などが顕著にみられることを指摘した。つまりこれらの家庭においては、両親間の葛藤、および親の子に対するきわめて不適切な態度が顕著だったのである。12%のものは、子どもの問題にはほとんど関知せず、32%のものは関知していてもその重大さを認識せず、34%のものは、問題を意識してはいたがそれを適当に処理することができず、22%のものは、きびしい体罰によつてそれを解決しようとしていたのであつた。全体として親の態度は、過度に厳格で拒否的であるか（父31%、母37%）、あるいは過度に放任的でしつけをしていないか（34%）であつた。すなわち原因論的には、葛藤家庭⁽⁴⁴⁾の中核を示すものは、親の子に対する態度の欠陥に求められる。

この Healy の研究につづき、Glueck⁽²²⁾が家庭に関するいわゆる非行予測5因子を見出したことは有名である。すなわち、1 父によるしつけ、2 母による監督、3 父の愛情、4 母の愛情、5 家庭全体の調和の5点が、非行少年をだす家庭と、非行少年をださない家庭とをみわける最も著しいものであるということが、みいだされたのである。このことは日本における館沢⁽⁶⁸⁾の同種の研究によつても裏づけられている。すなわちここでは、正常少年の家庭の77%が母の子どもに対する監督が適当であるとみなされているのに対し、非行少年の家庭においては、わずか13.2%が適切だつたにすぎない。同様にして、父による監督は正常少年の家庭の50.9%、非行少年の家庭の1.9%が適切であつた。父および母の愛情については、正常少年の家庭においては77.3%、および61.4%が良好とみなされたのに対し、非行少年家庭においては、32.1%、および18.9%という低率であり、最後に正常少年家庭の84.9%が家庭が調和しているとみなされたのに対し、非行少年家庭では37.7%が調和しているとみなされたのにすぎない。（ここで愛情の点については父親より母親のほうに開きがあるようにみうけられるが、この点については後説する。）この5因子のほか、少年の福祉に対する父母の関心、少年の将来に対する親の計画性、母親によるしつけ、なども Glueck の研究で重要なものとされ、館沢の研究においてもほぼ裏づけられている。またこれらの因子の重要性は、アメリカにおけるいくたの Glueck の追試研究⁽⁵⁾日本における多くの研究^(29,68,72)によつても、実証されているということはいうまでもない。すなわち親の過度の厳格、および拒否が——これらは親の不安定性や敵意の表現でもあるとみられるのであるが——まず最も有害に働き、ついで甘やかし、放任という直接の抑制の欠如

が問題にされるのであつて、これを愛情の点からみるならば、過度の厳格と相通ずる親の拒否、愛情不足ということが最も強調されるわけである。母親の愛情の方が父親の愛情よりも、より顕著な影響を与えていることは、おそらく子どもの生活場面において、母親の方がより愛情の対象として要求されているからであろう。なおしつけの点については、さらに一貫しないしつけ方が悪影響を及ぼし、さらに一般的に家庭内の不安定、不調和が悪影響を与えるものとみなされている。

4 親の諸影響の相互関連

しかしながら以上のような研究をもつてしては、親の影響をさらに細かく突込んで分析することは困難である。さらにこれらの研究においては親の態度が過去にさかのぼつて研究されているのであつて、非行少年の親はそれなりの目をもつて観察され、したがつてその結果が研究結果に反映してきたのではない、という疑いも残るわけである。この点、前述した McCord⁽³⁹⁾の研究はさらに一步前進したものといえよう。

すなわち不道徳家庭の分析の場合と同様、かれらはまず親の態度のタイプを、1 父母ともに愛情のあるしつけを行なっているもの、2 父母ともに体罰的なしつけを行なっているもの、3 父母ともに放任的なもの、4 一方が愛情あるしつけで他方が放任的なもの、5 愛情あるしつけ、放任、および体罰的なしつけの三者が両親において混合しているもの、6 一方が体罰的で他方が放任的なもの、にわけ（このうち後三者を、父と母のしつけが一致していないという意味において、不一致型とされる）、これによつて非行発生率を比較したところ、まず体罰的要素を含んだ放任主義、あるいは不一致家庭が最も非行を生み出しやすいことを見出した。これに対して一貫してしつけられたか、あるいは愛情型と放任型の混合によつて育てられたものは、最も非行に陥りにくい。そしてこの一貫したしつけの中でも、愛情型の家庭に育つたものは、他の二者に比べてさらに非行に陥る率が少なかったのである。ここで重要なことは、Glueck のような単純な研究の場合と違つて、たとえ体罰的な過度な厳格なしつけであつても、それが両親において一貫しているならば、特に非行を誘発しやすいとはいえないという点である。非行に対して最も抑制的に働くものはしつけの一貫性と結びついた愛情であり、これに対して非行に最も関係の深いものは、しつけの不一致性に結びついた体罰的なやり方である。McCord はこの結果を、もつぱら、両親を通じての社会規範、道徳性のとりいれの面から解釈している。すなわち愛情は両親からの道徳

性のとりいれに欠くことのできないものであり、一方、両親の一貫性は一貫した道德のとりいれに有利である。これに対して、放任的なしつけの場合には、おそらく子どもは道德観において、きわめて不確かな状態におかれたが、つて特に不良グループや、不良環境があつたときにそれに影響されやすいのではなからうか。

以上の考察において、体罰的なしつけまたは愛情の欠如の場合の情緒的な歪みという点を問題とせず、もつぱら価値規範のとりいれという点に目をむけている点はさらに批判の余地があるが、放任的なしつけを不良環境の影響と結びつけて危険視している点は、後に述べる Jenkins の研究と結びつけて興味深いものがある。もうひとつの問題は、たとえ体罰的であつても、一貫したしつけがなされている場合は、それほど非行を生じやすくはないという点であつて、ここではこの体罰的「一貫性」ということをもう一度ふりかえてみる必要がある。Glueck の研究においては、あきらかに過度に厳格な体罰的なしつけをする親は、同時に愛情のない親であるという関係がうかがわれる。ところが McCord の研究においては、一貫した体罰的しつけをおこなっている親においては、必ずしも愛情は欠けていないのである。したがつてこの点をあきらかにするためには、Symonds⁽⁶²⁾ が行なつたように、親の態度をしつけの線と愛情の線の二元的なレベルから考察してみることが必要であろう。たとえば日本で筆者らが行なつた研究においては、愛情の線における差、つまり親に愛情があるかないかという点は、子どもの非行に密接な関係をもつが、しつけの面における差、つまり愛情という要素をのぞいて、しつけがきびしいか、ゆるやかであるかという点は、非行とあまり関係をもたないようにみうけられるのである。

McCord はまた、別の角度からもより詳細な分析を行なっている。その結果、従来漠然と親の愛情および親の適切なしつけが必要であるといわれたことが、より詳細にうきぼりされた。たとえば、一方の親が拒否的であつても、他方の親が愛情があれば、それを補うること、しかしこの場合も母親の愛情の方がいつそう重要であること、母親が無関心であるときは、たとえ父親の愛情があつても、子どもは非行に陥りやすいこと、などである。その他親の不道德などについては前述した。

親の態度と非行との関係については、そのほか多くの研究があるが、最近注目されて来たものとして、原因論的に親の態度だけを問題とせず、現象的に親の態度と子の反応との相互作用をとらえようとする試みがあげられる。たとえば、Nye⁽⁴⁹⁾ は、非行少年を最も特徴づける

ものは親の拒否する態度であることを見出している。このような点は、本論では省略するが、原因論的考察を補うひとつの重要な点であろう。

5 非行のタイプによる親子関係の差

しかしここでもうひとつ問題になるのが、非行というもの、必ずしも単一の社会的、心理的疾患現象ではなくて、非行のなかにもいろいろのタイプがあるという点である。したがつて両親の態度と非行との関係も、必ずしも単一のものとして考えるわけにいかない。この点を最も端的に指摘したのが、Jenkins ら^(27,31,32) の研究である。Jenkins ら⁽²⁷⁾ は以前に Ackerson⁽²⁾ の行なつた情緒障害児のもつ症状の詳細な因子分析をもとにして問題児のなかに大きく3つのグループのあることを見出した。すなわち、1 引込み思案、はずかしがり、Apathy、狼狽、過感、服従性、白昼夢、劣等感、非社会性、泣きやすさ、過度の依存性、抑うつ性、無力感とともない、肉体的苦痛、神経症的疾患に陥りやすい抑圧型 (overinhibited group)、2 暴力的傾向、闘争性、残酷さ、権威への反抵、非行、罪悪感の不適切さがあり、利己的で嫉妬深く、復讐心強く、詐欺的で責任転化をし、他人を信ぜず、ことばが悪く、早熟な性的関心のある非社会的攻撃型 (unsocialized aggressive group)、3 集団の盗み、窃盗、習慣的意欲、夜遊び、家出、不良集団活動、によつて特徴づけられる社会的非行型 (socialized delinquent group) である。このうち第2群、第3群が非行少年に相当するものであり、Jenkins⁽³¹⁾ はさらに、両群のこまかな力動的機制を分析した結果、前者を frustration による不適応性非行、後者を文化感応の原因による適応性非行とみなしたのである。ところで、Hewitt と Jenkins⁽²⁷⁾ は、これらおのおののタイプに相当する親の態度の特徴をみいだした。すなわち第1群の (これは非行には関係はないが) 抑圧型神経症型の子どもの親は、抑圧型のしつけが圧倒的であり、父親による一定しないしつけ、父が過度に批判的であること、父または母の非社交性、支配的な母の態度、母の補償的拒否、同胞間の競争が、その最も著しい特性としてみいだされた。非社会的攻撃的非行児童の親は、主として拒否的であり、子どもが私生児であつたこと、父または母によつて望まれなかつた妊娠であつたこと、父または母による出生後の拒否、母が親の役割りを好まないこと、母の性的不道德、母の子に対する敵意、実父母といつしよにいることの少なかつたことなどが、最も大きな特徴としてあげられた。最後の社会的非行児の親は、子どもに対する無関心 (negligence) を特徴とし、家政の貧困、

家での規律のみだれ、監督の不足、父または母のしつけのゆるやかなこと、母の精神的欠陥、父または母のあらあらしいしつけ、同胞の再三の非行、都市の不良環境などが著しかつたのである。

ことに非行を理解するうえに重要なことは、非社会的攻撃の非行と、親の無関心さとの間にはほとんど関係がなく、逆に社会的非行と親の拒否との間にもほとんど関係がないことである。したがってわれわれが親の態度と非行との関係を理解するうえに、情緒的な障害から不適応性非行を発達させやすいものとしての親の拒否の態度、および文化的感応を通じて主として集団的な非行を発達させるものとなるものとしての親の放任または無関心、という2つのものをわけて考える必要が生じるのである。もちろん、実際の非行少年をみると、必ずしも単独の不適応性非行者と、集団の感応（感染）性非行者とにはつきり2分することはできず、むしろ多くが両者の混合型であり、したがってこうした点で親の拒否および放任、無関心ということは相互に結びつくものとしても考えなければならぬ。

6 基礎的人格形成の問題

以上の親子関係と非行との関係に関する諸研究を総合してみると、親の態度が非行形成に及ぼす影響としては少なくとも4つの面が考えられなければならない。第1の点は基礎的な人格形成に関する問題である。この点についてはおそらく親の愛情の欠如ということが最大の問題になるであろう。Jenkins⁽³²⁾の指摘するように、人間の社会化過程における最大の問題は、生後数年間における他の人間との情緒的な接触である。もしも、親のことに母親の愛情がうすければ、子どもは最初の基本的な人間関係を学習することができない。親だけが子どもに対する絶対の権威として、子どもの生活全体を支配するのであるから、たとえ兄妹や近隣の人に愛情をうけたとしても、それはけつして親の愛情の代償とはなりえない。基礎的な人間関係が形成されなければ、もちろん他人に対する思いやりや、道徳性のとりいれも行なわれない。かえって子どもは不安と敵意にみち、他人と世の中を自分に敵対するものとしてみるようになってゆく。かれにとつて世の中は、反撃すべき対象であるか、あるいはせいぜい利用できるものにすぎない。いや、そうした直接に非行的な問題だけでなく、さらに物事に対する関心、あらゆる人間的な欲求、一般の物事に対する情緒の発達も、基礎的な親子関係に基づく情緒および社会性の発達が阻害され、親による刺激や報酬がなかつたら十分な発達は望めない。さらに Friedlander⁽¹⁷⁾の指摘するよう

に、親の愛情の代償がなければ、子どもはいつまでも生まれたばかりの動物的な快感原則に支配され、欲求を抑制したり、その充足をひきのばすというような現実原則を体得することができない。こうして親の愛情の不足はまず情緒的未成熟、社会性発達の欠如、自我および超自我の発達の障害という点において、基礎的人格発達の阻害をきたすものといわなければならない*。

事実多くの研究がこうした母親の愛情の不足と、人格形成の障害との関係を実証している。Bender⁽⁶⁾は生後3年間の間に母親およびその代理との接触をもつ機会の少なかつた子どもたちが、愛情のうすい精神病質的な性格を形成することを見出した。Powdermaker⁽⁵²⁾や Goldfarb⁽²³⁾は、母親のない子どもを乳幼児期から追跡研究した結果、同じような結論に達した。Levy⁽³⁶⁾は乳幼児期に母親の役割りをする人が変わった子どもを研究した結果、同じように愛情のうすい精神病質的な性格の形成されることを見いだした。これらの研究の対象となつた子どもたちが、十分な母親との接触をもてず、人格形成の第1歩が阻害されたということは明らかである。Bowlby⁽⁷⁾の研究の結果は、生後3、4年以内に3カ月ないし6カ月以上母親の愛情からとり残されていた場合には、愛情に欠けた精神病質的な人格が形成されることを示している。（これに対して、3才または4才以後に愛情欠乏の状態がきた場合には、人格の基礎的発達障害というよりは、より表面的な自我および超自我の障害、つまりより神経症的な障害のおきることがみいだされている。）さらに Bowlby の普通児と施設児の比較研究においては、施設児の方に、規則を守ること、適切な罪悪感を感じること、および他人との関係を保つことなどが非常に困難なことがみいだされている。同じようなことは日本でも、池田⁽⁵⁶⁾らの研究によつて実証されている。

日本においては従来、愛情のうすい拒否的な、不道德

* 学習理論によつてもこの点はほぼ同様に説明される。たとえば Bandura ら⁽³⁾によれば、初期の人格形成は依存欲求の発達、およびそれが親によつて受け入れられるという点においてとらえられている。ただし Bandura らは後者の「依存欲求の阻止」に非行形成の重点をおき、前者のより基礎的な人間関係形成の面では非行誘因をあまり認めていない。しかしわれわれが一般に基礎的な人間関係として漠然と把握しているものを、2つの点にわけて考えている点では注目してよい。これはわれわれが同じ精神病質といつても、基本的に行動統制のとれない真性のものと、攻撃性を基調とした Jenkins の非社会的攻撃性非行者との間に若干の image のずれを感じることに、あるいは符合しているともみられるのである。

な親と子どもの非行との関係を論ずる際、おうおうにしてその遺伝的意義が強調されがちであつた^(28,74)。しかし本論においては、遺伝的考察は省略したい。少なくとも上述した研究が、非行児の親と子をあとからふり返つて研究しているのではなく、施設児を普通児と比べてそれを追跡研究した結果であつてみれば、遺伝的要素が入っているか否かはともかくとして、愛情の欠乏それ自体が、パーソナリティの発達に致命的な害を与えるということは、自明であろう。そしてこのような基本的人格が阻害されたまま育つた子どもは、後にいたつてこれを矯正し、基本的な情緒と人間関係を学ばせることは、きわめて困難である。Levy⁽³⁷⁾ や Greenacre⁽²⁴⁾ が指摘したように、もしこうした精神病質の児童が治療されうるとすれば、それは治療場面において極端に強い愛情が注がれ、それによつて治療者への同一視が起こつたときのみみられるものである。つまり精神病質というものは根本的に愛情飢餓をうめ合うだけのほんとうのものが与えられなければ、治療は出来ないと考えられるのである。(幼少期に失なわれたものを、成長してから獲得するためには、もちろん数倍のよい条件が必要になる。)そして精神病質の性格それ自身は、快感原則の支配、自我の統制の欠如、他人に対する一般的情緒の欠如などを伴うものであつてみれば、それが非行に直接結びつくこともまた当然である。

7 しつけと罰の問題

親子関係の非行に関する第2の面は、1次的な行動規制の様式の面である。適切なしつけが、子どもの行動を社会化させるものであることは、前記 Glueck ら⁽²²⁾ の結果をまたずとも、まづたく常識化されていることであり、最近の心理学的理論は、むしろその限界を強調する方向にあるといつてもよい。しかし総合的な学習理論の立場からは、やはりしつけの不足も大きな問題とせざるをえないのであつて、たとえば Bandura ら⁽³⁾ は、子どもに攻撃的行動が現われた場合、非行者の家庭にはそれを制止したり罰したりしない傾向が見出せたといつてゐる。また従来からの、より教育学的な、あるいは社会学的な理論によれば、直接の行動規制の面からも、また内面化された良心(超自我)形成の面からも、ある程度の罰が必要視されていることはいうまでもない^(54,70,71)。前記 McCord⁽³⁹⁾ の結論も、消極的にこれを支持している。しかし注意を要することは、筆者⁽⁴¹⁾ が以前に指摘したように、罰は多かれ少なかれ frustration による不適応行動を起こさせることである。学習理論の立場から、Mowrer⁽⁴⁵⁾ の学習二元論、Dollard ら^(12,13) の人

格論が示すように、罰の効果を、罰せられた行動の消去という面だけから単純に考えることはできないのである。さらに Nye⁽⁴⁹⁾ が見出したように、実際問題として罰やきびしすぎるしつけは、親の拒否と連なつていたりその合理化である場合が多いゆえ、いつそう frustration に連なり、こうして、Maier⁽³⁸⁾ のような極端な不適応理論をとるにせよ、あるいは精神分析理論をとるにせよ不適応反応、とくに攻撃的反應の固定化をみるわけである。この場合、ごく幼児期の基礎的人格発達障害と同じ機制が多かれ少なかれ考えられるのであるが、発達のにはより後期に属しがちであるため、基礎的人間感情の欠如というよりは、筆者⁽⁴¹⁾ が前論において示したように、むしろ敵意および攻撃性の潜在というかたちで非行的パーソナリティを形成する方が一般的であろう。これに対してしつけの過少は、前述した Jenkins⁽²⁷⁾ の放任、無関心の一部を形成するのであつて、より意志薄弱的なパーソナリティーとして、とくに文化感応の素質を作るものとして、非行に連なると考えられる。したがつて結論的には、罰の過大も過少も危険だということになるのであるが、しつけの方法を中庸に保てというように理解するより具体的な拒否や放任の影響が悪いのだというように理解すべきであろう。

8 社会的役割学習

親の態度が子どもの非行形成に影響する第3の点は、2次的な行動規制の面、つまりより社会的な態度の内容形成に関するものである。もちろんこれも前述の2点とはつきりわけて考えることはできない。たとえば、社会的役割学習にとつて重要な「同一視」という点を考えれば、基礎的人格の発達の条件としても、子どもの親に対する同一視ということは無視できない点であり、またしつけや罰の効果、それによる frustration の処理のしかたも、親に対する同一視の程度によつて異なつてくる。もちろん基礎的人格発達における同一視は、そもそも同一視する能力が形成されるかどうか、したがつて他人と関係する能力がつくかどうかという根本的な問題であるのに対し、社会的学習における同一視の問題は、むしろどのような同一視がおこるか、したがつてどのような役割りを子どもがとろうとしいくかという、むしろ内容の問題となつてくる。しかし、ここで同一視の内容の問題を単に親の道德性や、価値意識の偏りにのみ直結させて考えることは誤りであつて、McCord⁽³⁹⁾ が指摘したように、たとえ父親が不道德であつても、愛情と一貫したしつけがあるときには、子どもは父親の犯罪的な moral をとりいれることはしない。つまり同一視の形

成は単に社会関係だけにあるのではなく(子どもがどのような規範をもった社会、グループに属しているかということだけによるのではなく)、やはり、情緒的なものが影響してくるのである。したがって父親が犯罪的な価値基準をもち、しかも愛情にとぼしく、拒否的であるという場合には、子どもは情緒的にも不安定、攻撃的、非行的になり、これが父親の非行的価値規範をとり入れることを促進すると考えられる。これに対して、もし父親が犯罪的であつても、かれが愛情ゆたかであつたり、あるいはその代償として、母親が十分な愛情をもっている場合には、子どもは情緒的に反抗的になる必要がなく、したがって父親の犯罪的価値基準も、とり入れにくいのである。家庭内における役割り学習を、一般の社会集団における準拠集団(reference group)の法則(46,70)からのみ考える場合には、父親が愛情をもっていればいるほど、子どもは父親を準拠の規準とみなすわけであるから、したがって逆に父親の犯罪的価値基準をとり入れやすいという矛盾した結論に到達せざるをえないであろう。

非行的態度の形成、とくに社会的感性非行の形成にあたっては、不良環境からの不良価値規範のとり入れ(11,61)、不良集団や不良なまへの同一視(19)、ということが重要であることはいうまでもない。しかしながらこうした不良同一視の形成にあたっては、単に外部社会環境が直接影響するというより、その仲介として、あるいはそれを予防するものとしての家庭の役割りが大きいことも、否定できないようである。Recklessら(55)は、同じ非行地域に住む非行少年と、正常少年とを比較してみた結果、両者はその自己規定(self-concept)において、顕著な差がみられ、これが家庭における親子関係にもとづくものであることを、みいだしたのである。すなわちもし家庭における親子関係が満足なものであるならば、子どもは近隣の不良環境に影響されることが少ないのである。このような結論は、前述した McCord(39)の結論と一致している。もちろん、それ以上に親の役割りは、同一視や、とりいれの内容それ自身をも大きく規定するわけであるから、この面からも、正常な親の存在は不良環境に対する強力な抵抗剤になるわけである。この場合は、基礎的人間関係の形成ということだけでなく、同一視の内容が問題になってくるのであるから、男子の場合にはその手本として、母親よりも父親の役割りが大きくなってくるであろう。吉益(74)、樋口(28)らがみいだしたように、幼少期においては母の欠損の方が重大であるのに対し、それ以後においては父の欠損の方が重大であるということも、少なくともある程度は、こうした反映とみられるのである。

なお役割り学習、自己規定の形成は、家庭内の問題としても、単に親との同一視、親の role model だけによるものではなく、このほか親から与えられた非行者の自己規定が強く影響すると考えられるのである。一般的には、Sutherland(61)の初期の分化的結合理論(differential association theory)の修正である Cressey(11)、Glaser(19)その他の理論によつて常に唱えられているところであるが、非行者は世間から非行者として扱われ、そのイメージに自分を同一視することによつて真の非行者になると考えられている。したがってたとえ親の role model が偏つていなくとも、親に不良扱いされることによつて非行的学習はすすむと考えられるのであつて、前記 Reckless(55)の研究などもそれを示唆しているといえよう。

9 現在場面における家庭の役割

以上にのべた人格形成要因としての家庭の重要さの他に、もちろん家庭は、現在その場における少年の行動を規制するものとして、重要な役割りを果たす。これの理解のためには、それほど深い心理学的な吟味は必要ではない。拒否的あるいはあまりに厳格な親の態度が、子どもの frustration をおこさせ、子どもを不適応行動にかりたててことは自明であるし、同様に、しつけや監督の不足が子どもの行動を規制できず、主として不良環境の影響がある場合に、子どもをその影響に直接さらすことはいうまでもない。しかし、もしこれらの行動がくり返し行なわれるならば、それはしだいにパーソナリティ形成に関係して来るわけである。すなわち、親の悪影響が幼少期に起これば起こるほど、そしてまた、長期間にわたつて起こつていけばいるほど、それはパーソナリティの内部まで強い影響を及ぼし、それが年長になつてからはじめて現われたとか、あるいはごく短期間という場合にはその場その場の行動だけに影響する、といつてさしつかえあるまい。つまり現在場面における親の態度の影響は、人格形成に影響する親の態度のひとつの現われ、または延長として考えてよいのである。実際問題としては、現在の時点において、親の悪い態度があるときは、それは多かれ少なかれ、過去から持ちこされたものと考えなければならず、したがって、たとえば親が急に態度をあらためたとか、あるいは親からひきはなして適当な人のもとにあずけたという場合でも、過去の遺産であるパーソナリティの障害は残り、あたかも絶対的性格欠陥があるかのように、よい環境下でもなおかつ当分は非行がつづくということが大部分なのである。しかし、もちろん親の態度の悪い影響が比較的短期間であつたり長じてから起こつたりして、パーソナリティの比較的浅

い部分しか障害を受けていない場合には、環境の変化によつて人格が改善されることも比較的容易であり、これに反して幼少期に長い期間にわたつて悪影響を受けた場合には、前述した精神病質のように、ほとんど改善不可能となるのである⁽²⁴⁾。現在日本で多く報告されている非行児の家庭治療例^(34, 42, 65)では、大部分がごく幼児期にうけた深層不適応障害と、現在場面における不適応の刺激反応関係との中間的なものを扱っているとみることができよう。

現在の時点における frustration を云々する場合、幼少期に受ける影響と、とくに質的に異なつた注意すべき問題は、家庭の誘引性が弱まることによつて不良環境への誘引性が強まり、これが社会的不良感応の基礎になる点である。筆者⁽⁴²⁾が以前に指摘したように、実際の不良感染感応は、むしろこのような形で起こる方が、親の role model の偏りによつて起こる場合よりもはるかに多いとみなされるのである。さらにこのような点から考えるならば、現在の時点における親の影響としてもうひとつ比較的重味を増してくるのが、親の監督の欠如であろう。前述したように監督の欠如ということとは、人格の深い部分には比較的影響を与えないですむ。むしろ監督の欠如ということとは、長じてから子どもが社会環境にふれるようになったときに、主として必要になつてくるのである。つまり Jenkins⁽²⁷⁾ らの研究によつてあきらかなように、監督の欠如は主として文化的感応性非行と関係があり、この場合パーソナリティの形成は、家庭外の不良集団によつて著しく影響されてくるのである。Nye⁽⁴⁹⁾ による研究も、子どもの過度の自由が非常に狭められた場合の frustration と同様、主として外部の不良集団との関係において危険をもたらすことを実証している。したがつても子どもが情緒的に正常に成熟し、地理的に不良環境の接触がほとんどないときは、この監督の果たす役割りは、きわめて少ないといふことができよう。さらに監督の不足は、親の拒否や過度の厳格と違つて悪循環を起こすことはない。つまり親の拒否や過度の厳格の場合には、これによつて子どもが不適応をおこし、その結果不適応行動にでるならば、そのことによつてますます親の拒否および過度の厳格が強まるという悪循環がくり返されるのであるが、このような現象は監督の不足によつてはみられないという意味においても、より安全である。ただ監督の不足は、前述したしつけの不足と明確に区別できないため、多かれ少なかれ人格発達の一時的行動規制と関係していると考えられるし、また実際問題として現代の都市環境においては不良環境からまったく保護されているという状況は考えられないので

実際には危険が大きいのだと考えるべきであろう。

最後に前述した Szurek⁽⁶³⁾ や Giffin⁽¹⁸⁾ らの指摘した「親の無意識が子どもの非行をのぞんでいる」という影響を、ここにのべた現在時における影響の特殊な形であると考えべきか、あるいは以上にのべたパーソナリティへの諸影響の根底に多かれ少なかれあるものと考えべきかは、研究がさらに進んでみないと結論しえない。しかし Schwarz⁽⁵⁷⁾ らの指摘するように、子どもが多かれ少なかれ親の姿を鏡に写したようになるということは経験事実と一致するものであつて、遺伝生物学的考察は別としても、単なる同一視や役割学習の問題としてでなく、深い情緒的影響のし方をより細密に分析していく必要性を示唆しているものであるといえよう。

文 献

- (1) 安倍淳吉：社会心理学——現代心理学体系 2——共立出版、1956。
- (2) Ackerson, L. : *Children's Behavior Problems*. Univ. of Chicago Press, 1942.
- (3) Bandura, A. & Walters, R. H. : *Adolescent Agression*. Ronald, 1959.
- (4) Barker, G. H. : *Juvenile Delinquency and Housing in a Small City*. *J. crim. Law Criminol.*, 1954, 45, 442—444.
- (5) Black, B. J. & Glick, S. J. : *Recidivism at the Hawthorn-Cedar Knolls School; Predicted vs. actual Outcome for Delinquent Boys*. Jewish Board of Guardians, 1952.
- (6) Bonder, L. : *Psychopathic Behavior Disorder in Children*. in Lindner & Seliger (eds.) : *Handbook of Correctional Psychology*, 1947.
- (7a) Bowlby, J. : *Maternal Care and Mental Health*. World Health Organization, 1952.
- (7b) Bowlby, J. : *Fourty-four Juvenile Thieves*. Bailliere, Tindall & Cox, 1947.
- (8) Breckinridge, S. P. & Abott, E. : *The Delinquent Child and the Home*. 1912.
- (9) Burt, C. : *Young Delinquents*. 1925.
- (10) Campbell, M. : *The Effect of a Broken Home upon the Child in the School*. *J. Educ. Sociol.*, 1932, 5, 274—281.
- (11) Cressey, D. R. : *Epitomology and Individual Conduct, A Case from Criminology*. *Pacific Soc. Rev.*, 1960, 3, 47—58. または Cressey, D. R. : *Application and Verification of Differen-*

- tial Association Theory. *J. crim. Law Criminol.*, 1952, 43, 43~52.
- (12) Dollard, J. & Miller, N. E. : *Frustration & Aggression*. 1938.
- (13) Dollard, J. & Miller, N. E. : *Personality & Psychotherapy*. 1950.
- (14) Elliott, M. : *Correctional Education and the Delinquent Girl*. Harrisburg, 1928.
- (15) Ettinger, C. J. : *The Problem of Crime*. 1932.
- (16) Exner, F. : *Kriminologie*. 1949.
- (17) Friedlander, K. : *Psychoanalytic Approach to Juvenile Delinquency*. Routledge, 1947.
- (18) Giffin, M. E. ; Johnson, A. M. & Litin, E. M. : Specific Factors Determining Antisocial Acting Out. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 1954, 24.
- (19) Glaser, D. : Criminality Theories and Behavioral Images. *Amer. J. Sociol.*, 1956, 61, 433—444.
- (20) Glueck, S. : *One Thousand Juvenile Delinquents*. 1934.
- (21) Glueck, S. & E. : *500 Criminal Careers*. Knopf, 1930.
- (22) Glueck, S. & E. : *Unravelling Juvenile Delinquency*. 1950.
- (23) Goldfarb, W. : The Effects of Early Institutional Care on Adolescent Personality. *J. Exp. Educ.*, 1943, 12, 106—129.
- (24) Greenacre, D. : Problem of Patient-therapist Relationship in the Treatment of the Psychopath. in Lindner & Seliger (eds.) : *Handbook of Correctional Psychology*. 1947.
- (25) Healy, W. & Bronner, A. : *Delinquents and Criminals*. MacMillan, 1926.
- (26) Healy, W. & Bronner, A. : *New Light on Delinquency and Its Treatment*. New Haven, 1937.
- (27) Hewitt, L. E. & Jenkins, R. L. : *Fundamental Patterns of Maladjustment*. Springfield, 1947.
- (28) 樋口幸吉：非行少年の精神医学的研究。精神神経学雑誌, 1954, 55—9.
- (29) 法務総合研究所研究部紀要。第二分冊, 1960.
- (30) 市村潤：ロールシャッハによる非行少年とその親の比較。心理学研究, 1958, 29, 246—252.
- (31) Jenkins, R. L. : Motivation and Frustration in Delinquency. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 1957, 27, 528—537.
- (32) Jenkins, R. L. : The Psychopathic or Antisocial Personality. *J. nerv. ment. Dis.*, 1960, 131, 318—334.
- (33) 国立教育研究所：京浜工業地帯における非行生徒と正常生徒の比較。1958.
- (34) 厚生省児童局：児童のケースワーク事例集。
- (35) Lumpkin, K. D. : Factors in the Commitment of Correctional School Girls in Wisconsin. *Amer. J. Sociol.*, 1931, 37, 222—230.
- (36) Levy, D. M. : *Maternal Overprotection*. Columbia Univ. Press, 1943.
- (37) Levy, D. M. : On the Problem of Delinquency. *Amer. J. Orthopsychiat.*, 1932, 2, 197—211.
- (38) Maier, N. R. F. : *Frustration*. McGraw Hill, 1949.
- (39) McCord, W. et al. : *Origins of Crime*. Columbia Univ. Press, 1959.
- (40) Merrill, M. A. : *Problems of Child Delinquency*. Houghton Mifflin, 1947.
- (41) 水島恵一：非行の種々なタイプとその治療法。青少年問題, 5~9, 1957 および水島恵一, 非行問題行動予診テスト手引き。白亜書房, 1958.
- (42) 水島恵一：社会病。白亜書房, 1956.
- (43) Monahan, T. P. : Family Status and the Delinquent Child. *Social Forces*, 1957, 35, 250—258.
- (44) 森田宗一：家庭内の緊張。異常心理学講座, みすず書房, 1954.
- (45) Mowrer, O. H. : *Learning Theory and Personality Dynamics*. Ronald Press, 1950. Mowrer, O. H. : Two Factor Learning Theory Reconsidered, with Special Reference to Secondary Reinforcement and the Concept of Habit. *Psychol. Rev.*, 1956, 63, 114—128.
- (46) Newcomb, T. M. : *Social Psychology*. 1950.
- (47) Nile (霜田静志訳)：問題の子。講談社。
- (48) Nile (霜田静志訳)：問題の親。講談社。
- (49) Nye, F. I. : *Family Relationships and Delinquent Behavior*. John Wiley & Sons, 1958.
- (50) 小野善吉：非行原因に関する実証的研究。家裁調査官実務報告, 1958.
- (51) 大浦金蔵：非行少年と家庭。家裁月報 8—4, 9

- 7, 1956, 1957.
- (52) Powdermaker, F.; Levis, H. T. & Touraine, G. : *Amer. J. Orthopsychiat.*, 1937, 7.
- (53) Powers, E. & Witmer, H. : *An Experiment in the Prevention of Delinquency*. 1951.
- (54) Reckless, W.C. : *The Crime Problem*. 1950.
- (55) Reckless, W. C.; Dinitz, S. & Kay, B. : The Self Component in Potencial Delinquency & Potencial Non-Delinquency. *Amer. Sociol. Rev.*, 1957, 22, 566—570.
- (56) 池田由子 : 乳児院収容児の精神医学的研究. 精神衛生研究, 1955, 3, 42—96.
- (57) Schwarz, B. E. & Ruggieri, B. A. : Morbid Parent-Child Passions in Delinquency. *J. Soc. Therapy*, 1957, 3, 180—196.
- (58) Shaw, C. R. & Mckay, H. R. : *Report on Social Factors in Juvenile Delinquency*. National Commission on Law Observance & Enforcement, 1931.
- (59) Shideler, E. H. : Family Disintegration and the Delinquent Boy in the United States. *J. crim. Law Criminol.*, 1917—1918, 7, 709—732.
- (60) Slawson, J. : *The Deliquent Boy*. Badger, 1926.
- (61) Sutherland, R. H. : *Principles of Criminology* 1937.
- (62) Symonds, P. M. : *The Psychology of Parent-Child Relationship*, 1939.
- (63) Szurek, S. A. : A Note on the Genesis of Psychopathic Personality. *Trends. J. Psychiat.*, 1942, 5, 1—6.
- (64) 竹村 寿 : 少年犯罪の社会学的研究. 司法資料 1953.
- (65) 玉井収介・柏木 昭 : 盗みをする子供の治療. 精神衛生研究, 1957, 5, 63—94.
- (66) 谷 貞信 : 少年犯罪の精神医学的研究. 精神神経学雑誌, 1929, 31.
- (67) 館沢徳弘 : 少年非行の予測. 家裁資料 1954, 35, 271—334.
- (68) 館沢徳弘 : 非行の予測研究. 家裁調査官実務報告, 1955.
- (69) 坪田正男 : 継母と問題の青年. ケース研究, 1955, 32, 36—41.
- (70) Tappan, P. W. : *Juvenile Delinquency*. 1949. および Tappan, P. W. : *Crime, Justice and Correction*. 1960.
- (71) 植松 正 : 犯罪少年の心理と教育. 児童心理叢書V, 金子書房.
- (72) 牛窪 浩 : 非行少年の家庭的背景. 刑政, 1956, 67—11, 21—31.
- (73) Weeks, H. A. & Smith, M. D. : Juvenile Delinquency and Broken Homes in Spokane. *Soc. Forces*, 1938, 18, 48—55.
- (74) 吉益脩夫 : 犯罪心理学. 東洋書館, 1952.
- (75) Young, P. V. : *Social Treatment in Probation and Delinquency*. 1937.

(1961年11月24日 原稿受付)